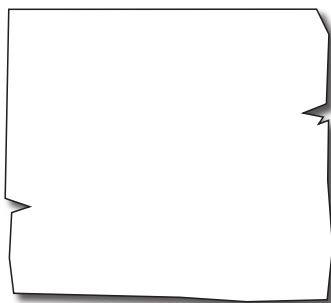


7 THE 7 FRAMES FOR ALL LIFE 7つのワクワク枠

もう1つの シンプルエピソード ～分岐点～



木 岬 さんぽ
KIMISAKI SAMPO

新しい人類も
いつか、ここへ——。

妻^{るね}瑠音、親友^{ここえ}心笑君、おじいさん…と生み出し合う
青年期 - 壮年期さんぽのフルーツフル誕生物語

SAMPO FRUITS



7つのワクワク枠

エピローグ

’94 春（7ヶ月後）

学生当時の、その研究発表の内容は、そのまま論文にまとめられ、マイナーな文献に掲載された。しばし反響があったらしかったものの、その後、ほとんど、みんなに忘れ去られてしまったらしかった。

そのことは、大学の必修のカリキュラムをこなすのがハードになりつつあった一人の医学生にとって、かえって、ありがたかった。

’95 初夏（1年9ヶ月後）

瑠音は、夢を実現して、晴れて小学校の教師となっていた。その小学校は、大学生時代に暮らしていた地方都市の郊外にあった。

大学5年生の僕は、基礎臨床修練と呼ばれる実習が始まっていた。

’96 初夏（2年9ヶ月後）

瑠音は、小学校で、子どもたちを相手に、はりきっていた。

大学6年生の僕は、医師国家試験に向けた勉強に明け暮れていた。

そのころには、大学内のポストを得るべく大学院に進学して学問をする道は、すっかり断念していた。ライフサイエンスの研究の現場の様子を肌身で知った僕は、“生計のための臨床の合間に自分のペースで好きなように成果を磨き上げるべく、コツコツと学問——知愛を続けるのがベストだろう”という結論に達していたからだ。

’97 春～（3年7ヶ月後～）

医師国家試験に合格した。卒業後に所属した医局の意向で臨床の内科研修をするようになった僕は、とある病院に派遣された。

その医療現場で、バリバリの臨床医の仕事が生半可な気持ちでは勤まらない現実を肌身で知った。

夜中の2時ごろに（当時及し始めていた）ポケベルで呼び出され、雪の中、自転車のペダルをこいで病棟にたどり着き、患者さんの最期を看取ったこともあった。あるウイルスが、患者さんから自分に感染してしまったかもしれないと不安にかられるようなアクシデントもあった。

休日に、いざという時のためにポケベルを持ち待機していたこともあった。患者さんに感情移入しすぎて、涙を抑えられないこともあった。ストレスで心身を病みかけたこともあった。

...

周囲の先生に何度も助けられた。

睡眠を削りながら、感染症のリスクを背負いながら、ストレスを抱えながら…つまりは寿命を削りながら、淡々と仕事をこなし続けるバリバリの臨床医の先生方を心底尊敬するようになっていた。

ドジして周囲に頼ってばかり、バランスくずしてばかり…の自分は、臨床医として、明らかに失格で、——落ちこぼれだった。

それとは対照的に、瑠音の方は、小学校で、水を得た魚のようにイキイキと子どもたちと関わり合い続けており、——優秀だった。

それは、瑠音にとっての天職だった。

’98 春（4年6ヶ月後）

臨床は、中途半端な覚悟では勤まらない。

僕にとって、バリバリの臨床の仕事は—— 学問の片手間にでき

ることじゃないし、心の自由を奪い身も心もズタズタにして自分を学問どころじゃなくさせてしまう激烈なストレス源であるし、何より、患者さんたちをはじめ多くの方々に迷惑をかけてしまう営みだ。

研修から医局に戻った僕は、意を決して辞表を出し依願退職した。

この体験は、自分に向いているのは、面と向き合って直接特定の誰かのために貢献することではなく、コツコツと何かを育むことで間接的に不特定の誰かのために貢献することだと僕に確信させた。

僕は、コツコツ何かを創り上げることによって、間接的にみんなに貢献するのが向いている——そういうタイプの人間だ。

思いきって仕事を辞めてしまった僕を、それでも「好きなことをするのが一番よ」と励ましてくれたのは、瑠音だった。

この退職を期に僕は、願の心からの自由を得て、成果を磨き上げて広めるべく、コツコツと学問——知愛に専念し始めた。

なけなしの貯金だけを頼りに——。

’99 初秋（5年後）

その非現実的な心底自由ライフを半年体験した僕は、貯金が底を尽きかける前に、細々とアルバイトを始めることにした。そのアルバイトは、なぜか近くのスーパーで品出しだった。バイト代は確かに安かったけれど、それでも仕事は楽しく、ありがたかった。

’00 春（5年7ヶ月後）

その後、幸いにも、研修医時代に一度経験のあった、精神的な負

担が比較的少なく、なおかつ、迷惑がかからず、自分でも役に立てる“医師としての仕事”に巡り会うことができた。

おかげで、生活が、どうにか、まわり始めた。ありがたかった。

’05 夏（10年10ヶ月後）

非常勤のアルバイトの身分であったという意味では、確かに不安定であり続けていたし、決して裕福でもなかった。

それでも、そんな僕と、瑠音は結婚してくれたんだ。

婚約指輪を手渡していたくせに、どうしても口から言えないまま、それぞれ家路についてしまったのちに、その頃すでに世の中に広く普及していた携帯電話のメールで伝えた。

君は、自分以上に大事な宝です。結婚しよう。さんぽ。

ありがとうございます。よろしくお願いします。瑠音。

——ありがたいのは、こっちの方こそだった。

それから、夢見ているみたいに幸せな新婚生活の日々が続いた。

’06 初秋～（12年後～）

自分なりに学問——知愛の成果をコツコツと育み続けていた一方、赤ちゃんは、なかなか授からなかった。

たとえ、妊娠検査薬で陽性が出るころまでは、たどり着けても、それでも、心臓の拍動が確認されないままに流産することを、何度か繰り返したのだった。

本屋さんだけでなく、その頃には、一般に広く普及していたイン

ターネットも利用しながら情報を収集して、さまざまな試行錯誤を続けたけれど—— そのうち、妊娠検査薬で陽性にもならなくなった。

このまま、ずっと授からないのかもしれない——。

しばしば、そのような悲観的な想いにとらわれかけた。

僕は、赤ちゃんをなかなか授からない不安を乗り越える気分転換のためにも、自分なりに育んだ学問——知愛の成果を少しでも広めべく、ウェブサイト上で、ささやかに発表するために、コツコツと準備し続けることにした。

一方、瑠音は、赤ちゃんをなかなか授からない不安を乗り越える気分転換のためにも、教師の仕事に没頭し続けた。

’08 春～（14年6ヶ月後～）

ウェブサイト作りが一段落して、生まれて初めてウェブサイトをアップした。

それでも—— 僕らは、赤ちゃんを授からず——

瑠音は、教師として、子どもたちの指導に邁進し続けた。

’11 春（17年6ヶ月後）

大震災が直撃した。

瑠音は、小学校での授業中だった。

「子どもたちが無事で何よりだった」と瑠音は何度も言っていた。

岬のおじいさんも、命からがら高台に逃げて無事だったけれど、

家が地震と津波で全壊してしまい、のちに仮設住宅で暮らし始めるまでの間、僕の実家で生活することになった。

わが住まいも、被災していた。

停電、断水、ガス停止の生活を何日も強いられた。

のちに、電気、水道、ガスが順次復旧したとき、心底感謝した。

温かいシャワーが、どんなにありがたいと身にしみたことか——。

何よりも、命の無事が、どんなにありがたいことだったか——。

それでも、その後、原発事故の影響を含む、さまざまな厳しい現実直面し続けた。

’11 夏（17年11ヶ月後）

ふたりで帰省した折、仮設住宅のおじいさんの元へ。

ニコニコしながら紡がれた、おじいさん語録——

「アイアイ愛じゃな。ワクワク枠、イキイキ息シリーズの最新版が見つかったわい。アッハッハッ！」

「おまえさん、ずいぶん、やせたんじゃないか？ 奥さんのためにも、体調管理、しっかりするんじゃぞ」 年をとって弱り、心配されるべきおじいさんが、逆に心配してくれた。

確かに、その頃、原発事故を含む問題に対する心労がたたり、僕の体重は減っていた。

’11 初秋（18年後）

岬のおじいさんが老衰のために亡くなった。

おじいさんからの手紙には、感謝の気持ちがつまっていた。

若者たちへ

先日は、尋ねてきてくれて、どうもありがとう。

うれしかった。

たとえ、どんなにつらいことがあったとしても、なんでもいいから、ありがたいなあと思えることを見つけ続けるんじゃぞ。

それができれば、きっと、心からの笑いをとりもどせる。

それが人生じゃ。

おまえさんらは、まだまだこれからじゃ。

幸せに生きるんじゃぞ。

これまで、本当に、どうもありがとう。

ありがとう。じゃあに。

岬のおじいさんより。

追伸、“アインシュタイン”にもよろしく。

’13 初夏～（19年8ヶ月後～）

『大栗先生の超弦理論』という本に会って、衝撃を受けた。

この本との出会いをきっかけにして、全く予想外に、物理学の特
大ブックサーフィンが始まり、物理学にのめり込むことになった。

それは、3ステップス自然哲学——3ステップス自然知愛の適用
範囲をさらに深く広げようとする試みにつながっていた。

’14 初秋 (21 年後)

それから1年ほどの間、自己流で物理学に取り組んだ結果、光子や重力子の幾何モデルが生まれ、半信半疑だったけれど、ついに、重力が量子化できたかなと思えるような成果にまでたどり着いた。

でも、その成果は、従来の物理学の常識、“エネルギー保存則”と真っ向から対立していた。

教科書に載っているエネルギー保存則が間違えているはずがないし—— こっちの重力の量子化が間違えているのだろう。それにしても、いったい、どこがどのように間違えているのだろう？ ……

そのときだ。高校時代の親友心笑君のレアな笑顔が心に思い浮かんだのは。心笑君——ニュートン君、なつかしいなあ。

…

あの心笑君——ニュートン君なら、きっと何か教えてくれるにちがいない。今ごろ、彼は、いったい、どこで何をしているんだろう？

’15 冬 (新春) (21 年 4 ヶ月後)

心笑君——ニュートン君と再会したいという思いが募った僕は、お正月に地元へ帰省した折に、彼の自宅を訪れることにした。

彼は、意外にも、何かの事情で物理学の大学院を中退して、それから帰郷して地元の高校の物理学の教師になっていた。さらには、驚いたことに、彼は元教え子と結婚しており、最近赤ちゃんが生まれていた。娘の名は、笑愛—— 僕に抱っこさせてくれたりもした。

久々に再会した心笑君は、名前らしく笑みをたたえ続けていた。

もう笑顔がレアではなくなっていたのだ。

そんな彼に、彼の書斎で、さっそく、例の成果を見せてみた。

彼は、食い入るように読んだ。何度も読み返していた。

「どうもありがとう——」 心笑君が、しみじみとつぶやいた。かと思うと、「——うん、間違いない。ここから育まれる物理学は、従来の物理学を根底から改善させながら、自然—— nature との調和性をより高められる可能性がありそうだよ」と続けて言った。

「——え？ でも、エネルギーが保存されていないよ。」

従来の物理学の常識と真っ向から対立してしまっている。だから、きつと、どこか根本的に間違えているんだろうね」と僕。

「——間違えているのは、従来の物理学の常識の方、例外のないエネルギー保存則の方さ」 全く意外な答えが返ってきた。

「え？ でも、エネルギー保存則は、常識中の常識だぜ？」

いくらなんでも、それは、ありえないんでないかい？」

「その気持ち、とっても、よくわかるよ。僕も同じだったから。」

でも、よく確かめてみたら、例外のないエネルギー保存則の方が間違えていると納得できるのさ。例外のないエネルギー保存則は、よく確かめられてこなかったウワサにすぎなかったってことなのさ」

「ウワサ——たとえ親友の君の言葉でも、さすがに納得できないよ」

「——実証するよ。例えば、ここにりんごがある」 心笑君は、りんごの1つを手を持った。「ここでりんごを手放せば、どうなる？」

「落ちるよ」

「落ちて、そのあとどうなる？」

「落ちて、そしたら、大きな音が響いて、りんごの一部がへこんで、そのあと、りんごが転がるよ」

「そのとき、大きな音が響いて、りんごの一部がへこんで、りんごが転がる際のエネルギー源は何だい？」

「位置エネルギーだよ。落下すれば、位置エネルギーが運動エネルギーに転換する。その運動エネルギーが元になって、大きな音が響いたり、りんごの一部がへこんだり、りんごが転がったりするのさ」

「その通りだね。学校の授業で習った通りだよ。」

では、次に、このりんごを、そうっと床に置いたらどうなる？」

「どうなるって——」

「大きな音、りんごのへこみ、りんごの転がりは、どうなる？」

「生じないよ」

「その通り」 心笑君は、実際にそうっとりんごを床に置いてみてから再び口を開いた。「ここで疑問に思わないかい？」

「どんな疑問？」

「大きな音を響かせたり、りんごをへこませたり、りんごを転がしたりできたはずのエネルギーは、どこへ行ったのか？ って疑問さ」

「——どこへ行ったんだい？」

「消滅したのさ。そのことが、以上で実証されたこととなる」

「ええ！？ 待った、待った。でも、エネルギー保存則によれば、エネルギーは消滅しないはずだよ。きっと、大気との摩擦熱とかに変化して、エネルギーが逃げたんだよ」

「同じような実験は、空気がほとんどない真空中でもできるよ」

「——」 . . .

「確かに真空中では音が出ないけれど—— 落とされたりりんごは、へこんだり転がったりするのに、そうっと下ろされたりりんごは、

へこまないし転がらない。大気との摩擦熱や音としてほとんどエネルギーが逃げようがない真空中において、りんごをへこませたり転がしたりできたはずのエネルギーは、いったいどうなったんだい？」

「——」・・・消滅したとしか考えられない？ 「——ええ！？ エネルギーって、実は消滅するの？」

「そうさ。同じような実証実験は、卵や陶器の皿でもできる」

「——確かに」

「しかも、エネルギーが消滅する事実に加えて、自然界で一見エネルギーが保存しているように見えている事実があるから—— 自然界のどこかでエネルギーが生成していなければおかしいってこともわかる。つまり、エネルギー消滅の実証実験から、エネルギーは、どこかで生成しているはずだってことも無理なく予想できるのさ」

「——」・・・

「実際、エネルギーの生成の例は、見つけられる。

例えば、従来の量子物理学においてさえも、すでに、短時間であれば仮想粒子が生成&消滅することを認めている。この仮想粒子が生成&消滅する過程では、その短い時間の間、平均エネルギーがプラスマイナス0であり続けているのではなく、平均エネルギーがプラスであり続けていて、その間はエネルギーが生成しているんだ。

しかも、時空が不連続ならエネルギー保存則が成立しないことを、ネーターの定理が証明している。だから、プランクスケールで時空が不連続である君の成果において、光子や重力子の生成過程がエネルギーの生成過程であっても全く問題がなくなるんだよ。

これらの意味で、エネルギーの生成は、自然——natureと調和し

ているだけでなく従来の物理学とも調和していることになるんだ。

しかも、例えば、電荷エネルギーや磁極エネルギーは、周囲に生成する仮想光子を何度剥ぎ取って光子を生成させても、その都度再生する究極の再生可能エネルギーでもある。この電荷エネルギーや磁極エネルギーからエネルギーを引き出す方が、質量エネルギーからエネルギーを引き出すより、はるかに安全で桁外れに効率がいい。例えば、陽子1つ分の質量エネルギーよりも、陽子1つ分や電子1つ分の電荷エネルギーの方が、 10^{18} 倍以上も大きいから」

「 10^{18} 倍——」 チンプンカンプンで意味もよくわからないまま、僕は、その部分を繰り返した。——心笑君には、かなわないや。

「そうさ。この桁外れに効率のいいエネルギー源こそが、あらゆる電磁波のエネルギー源でもあるんだ。太陽から地球へ届く光、電気ストーブから放出される赤外線、携帯電話やスマホから放出される電波も例外じゃない。もちろん、電子等の電荷が振動する際に、熱運動エネルギーとして周囲に散逸する形ではエネルギーが消費される。でも、同時に、生成した仮想光子がはぎとられて電磁波が周囲に放出される形だけではエネルギーは全く消費されないんだ。だから、例えば、太陽の寿命は従来の計算より延びるはずだし、スマホの電池は電波そのもののエネルギーとしては消費されていないはずだし、健康被害を含め悪者にされることの多い電磁波は、上手に利用できれば、本来人類の大きな味方になりうるはずなのさ」

そこで、僕は決意を固めた。「——心笑君、ここから先は、ぜひ、心笑君が育ててみてくれるとうれしいんだけど、どうかな？」

「本当にいいのかい？ これを十分に育めれば、もしかしたら、物

理学を成熟させることができて本当に21世のニュートンになれるかもしれないんだぜ？　こんなに、やりがいがあるってワクワクできる学問分野は、めったにないんだぜ？」

「いいも何も、誰より心笑君こそが最適役だよ。

それに、その方が、きっと全人類のためにもなっているよ。

——それに、恩返しでもある。

僕らが結婚できたのは、君のおかげでもあるのだから——」

「——」

「心笑君——　君こそ、21世紀のニュートンになってほしい。

それこそが、僕や瑠音を含めて、みんなが喜ぶことさ」

「——ありがとう。

実は、恩返しすべきなのは、こっちの方こそなんだよ」

「——え？」　　？？？

彼は、机の引き出しから、ある文献を取り出した。

それは、20年以上前の学生時代に僕が書いていた、あの論文を収録した文献だった。見るからに、ぼろぼろになっていた。

「それは——」

「そう。君の研究論文さ。君の成功が心底うれしくて、すぐ購入して、当時から読んでいたんだよ」

「——」　　・・・

「結構ぼろぼろになってしまったけれど、ぞんざいにあつかったり、保存状態が悪かったりしていたせいじゃないんだぜ。何度も何度も読み返していたからなんだ。ここ20年くらいの間に、何十回何百回と読み返しているよ」

「——」　言葉にならなかった。涙が込み上がり、しばし、涙ぐんだ状態のまま涙をこぼすのをこらえた。

「それで、君の論文がヒントになって——　実は、僕も、すでに新しい物理学を育んでいたんだよ。大学院に進学した頃から——」

「——」　　・・・

「だから、君の重力の量子化と、僕の重力の量子化が、瓜二つであるのを見て、驚いただけでなく、心底うれしかった。

それを見て、確信したんだ。間違いのないんだって——。

自分が進んでいる道が間違えていなかったんだよって、本家本元から、お墨付きをもらえたような気分だよ」

「——」　　・・・

「君と僕は、別々に同じことを発見したことになるんだよ。

僕は、ずっと孤独に、ひそかに、この新しい物理学を育んできていたから、そのことが、どんなに心強いことか——」

彼は、机の引き出しから、プリントアウトされてクリッピングされていた用紙の束を取り出すと、重力の量子化の成果が載っているページを広げて見せてくれた。

確かに瓜二つだった。それでも、彼の成果の方が、はるかに厳密で、はるかに深みを持っていることは、一目瞭然だった。

ページを閉じた彼は、「まだまだ完全からほど遠くて未完成なのだけれど——」と言いながら、その用紙の束を、僕に手渡ししてくれた。

僕は、しばらく食い入るように読みながらページをめくり続けた。

心笑君が、はるかに先に、はるかに広く進んでいることは明らかだった。彼は、3ステップス自然哲学——3ステップス自然知愛の

適用範囲を、物理学のほぼ全分野にまで広げていた。

「時間は無限じゃないから、どこかで切り上げなければならないんだけどね」 心笑君は、静かに、そう言った。

心笑君は、素スピノル物理学としての体系化をすでに見事に成し遂げ、新しい物理学を誕生させていたように思われた。

それは、まさに、心笑君の健やかな自己実現——自己フルーツ化、そして、彼らしいフルーツの現出だった。

その成果には、さまざまな統合も含まれていた。

それらの統合を含む成果に興奮しながら僕は口を開いた。「すごいよ！！ アインシュタインもできなかった統合を成し遂げているよ！！ 矛盾が減って、自然との調和性が高まっているよ！！

間違いないよ！！ 君は、まさに 21 世紀のニュートンだよ！！

早く公表しようよ！！」

「——ありがとう。

でも、まだ自信ないんだ。まだまだ完全から、ほど遠いから——。

それに、まだまだ改善の余地があるだけでなく、大きく間違えているところもあるかもしれない——。

本物のニュートンも、自身の研究成果の発表をためらっていたらしいけれど、その気持ち、今、とてもよくわかる気がするんだ」

——それで、提案なんだけれど、一緒に連名で公表しないかい？

重力の量子化の説明は、ふたりともが別々の発見者だったのだし、そもそも、君の成果である 3 ステップス自然知愛が大いに役立っていたのだから」

「——。 ——それは、おこがましいよ。

こっちは、ちょっとした思いつきを、片手間に、ちょこちょこつと細々と試してみただけの話さ。

本物のニュートンのように、統合を果たしながら新しい物理学を体系化し、自然との調和性を高めているのは、まさに、心笑君、君なんだよ。3 ステップス自然知愛については、それが役立っていたことを、さらつと触れてくれるだけで、こっちは十分満足だよ。

この各種の統合を含む物理学の新しい体系化、自然との調和性の向上は、まぎれもなく君が誕生させた成果であり、すべて君の業績であるべきなんだよ。

その方が、21 世紀のニュートンとして、誰もが納得できることだよ。それに、その方が様になっていてカッコいいよ。

よっ！ 21 世紀のニュートン！」

名前らしく笑みたたえていた心笑君が、さらに笑顔になった。

’16 初夏 (22 年 9 ヶ月後)

それから 1 年半近く経った頃、心笑君の新しい物理学の体系は、さらに磨き上げられて、ついに公表されるに至った。

“時間が無限でないから” という条件の中の妥協の産物の一面もあったとのことだったけれど、心笑君らしい見事なフルーツだった。

さまざまな新しい統合が示されていたのみならず、健やかな全人類レベルのライフの誕生のためにもなるだろう、画期的な応用にたどり着くためのヒントも示されていた。

これらの新しい物理学の成果は、健やかな全人類レベルのライフの誕生のために役立つだけでなく、健やかな天体生態系社会レベル

のライフの一員化のためにも役立ち、多くの人々を喜ばせられるはずだと僕は確信し始めていた。

心笑君は、きっと、多くの人々に祝ってもらいながら、もっともっと幸せになれるだろう。僕は、そう確信し始めていた。

’17夏 (23年10ヶ月後)

そして、それは、現実になった。

心笑君の研究成果が、評価され、絶賛され、社会的に認知された。

「おめでとう。おめでとう。まったく、おめでたいやきだよ」と僕。

「ありがとう。ありがとう。まったく、ありがたいやきだよ。

君の成果のおかげであるから。

君の成果がきっかけで生み出された成果のおかげさ」と心笑君。

「いえ、いえ、どういたしましてだよ。

むしろ、こっちこそ、ありがたいやきだよ。こんなに、うれしい気持ちになれることなんて、めったにないことだし。僕の成果が、少しでも役立っていたなんて、とても光栄だよ」

「こちらこそ、そう言ってもらえて、とても光栄だし、まったく、ありがたいやきだよ。——それに、実は、ほかに、感謝しても感謝しきれない恩があったんだよ」

「何^{なん}の話？」

「実は、まだ、話したことなかったけれど——僕は、結構、重い病をかかえていたんだよ。だから、僕は、もともと、こんなに長生きできるはずではなかったんだよ」

「え？」

「高校を卒業できたことも、大学を卒業できたことも、奇蹟だって主治医の先生に言われていたくらい。だから、自身の恋愛なんて、夢また夢の話だったし」

「そんな——」・・・

「ごめんよ。あまり、余計な心配をかけたくなかったから、ずっと内緒にしていたんだけど——せっかくお医者さんになった君に相談できなかったことも、どうかゆるしてほしい。今の医療の限界を、何十年もの間、身にしみて知っていたから——」

「いやいや、そんな、ゆるすも何も、全然——」

「とにかく、それでも、高校時代から、君の存在のおかげで、君らの存在のおかげで、僕は前向きに生きることができていて——おかげで、病のつらさを乗り越えることができていて——特に君の学生時代の論文が発表されてからは、新しい物理学に夢中になって——夢見ているように幸せな時間を過ごすことができて——おかげで、ますます病のつらさも乗り越えられて——しまいには、いつしか、病から、すっかり解放されるようにもなっていたんだ。

この最高級に楽しめるエンターテイメントのおかげで、それこそ寝食も忘れるくらい夢中になれていたおかげで——病のことをすっかり忘れてしまっていただけでなく、病がすっかり落ち着いてきてくれて、あげくは、完全緩解にさえ至ってくれていたんだよ。

完全緩解から、もうかれこれ何年も経っていて、再発の心配もないよってお医者さんからも、お墨付きを、もらっているほどだよ。

そして、そんな夢見ているみたいに幸せな日々を送っていたおかげで、妻の知^ち愛^あと再会できて、意気投合できて、結婚もできて、子

どもを授かることもできて… 本当に、今だに夢を見ているみたいなんだよ。だから—— この研究成果も、娘の笑^あ愛も、まさに君のおかげで誕生できた存在なんだよ」

「——」 . . .

「君のおかげで、そもそも、こんなに長生きできて、これほど充実した人生を歩めていたんだよ。

だから、本当に、感謝しても感謝しきれないくらい—— まったくもって、ありがたいやきなさ」

「いや、まったく、おめでたいやきだよ！ おめでたいやき！

それに、うれしい。自分のことのようにうれしい。

まさに、ここえみたいやきだよ！

ここえみたいやき！ ここえみたいやき！」

「フッ。ありがたいやき！ ありがたいやき！

——そういえば、感謝のしるしと言っちゃ何だけれど、僕の物理学の成果——成果親友へバージョンというのを作ってみたんだけど、受けとってくれないかい？ 純粋に極上エンターテイメントの1つとして体感してもらえたらうれしいんだ。この楽しさや感動が少しでも広まってくれば、すごく、うれしいんだ」 そう言って、心笑君は、プリントアウト冊子を僕に差し出した。

「あ、ありがとう」 受けとった。

「この中の数学は、ほとんど中学や高校の数学レベルだから、きっと十分に理解できるはずだよ。——って言ったりしたら失礼かな」

「ううん。全然そんなことないよ。助かるよ。楽しみだなあ。

ありがたいやき！ ありがたいやき！

よし、じゃあ、僕も、少しでも広まるために、一肌脱がせていただくぜーい♪」

「ありがたいやき！ ありがたいやき！」

それからしばらくたったある日

その極上エンターテイメントを体感してから、どれくらいたった日のことだったのだろう。

久々に、妊娠検査薬で陽性判定が出た。

「ええ！？ ——本当？」

「本当——」

溜音のはにかみと不安と楽しみが入り交じった心笑み——。

このまま無事、育ってくれ！ 無事、育ってくれ！

. . .

それから何年も後の初夏（何十年も後）

帰郷の際の散歩がてら、あの地球のかすかな丸みがわかる岬に久々に一人で来ていた。座りながら思った。

僕は、地球人だ——。

いや、それだけでない。僕は、宇宙人でもある——。

「わしゃあ、宇宙人じゃからのお」 おじいちゃんは、そうとも話していたっけ——。

...

——ああ、すっかり眠たくなってきたよ。

いったん、お昼寝でもしようか。

横になった。

でっかな青空が広がっている。白い雲が浮かんでいる。

さわやかな潮風が全身をなでている。

それから目を閉じた。

ゆっくり、ゆったり深呼吸しながら—— 心笑みながら——

かつてのおじいちゃんのように——。

まどろみの中で、替え歌を作っちゃったりもしながら——。

作曲 初果ひるね 作詩 おじいちゃんひるねさんぽここえ——。

タイトル『Joy of Life』——『生歓喜』？

ドコドコドコトバ♪ コココココココロ♪ イマイマイアタマ♪

ポカポカポカラダ♪ ホワホワホワハハッ♪

ありがたいやき♪ おめでたいやき♪ ここえみたいやき♪

アイアイアイデア♪ ワクワクワクフウ♪ ニコニコニコエ♪

イキイキイキモチ♪ ソワソワソワハハッ♪

ありがたいやき♪ おめでたいやき♪ ここえみたいやき♪

ウキウキウキボウ♪ ユウユウユウボウ♪ アイアイアイボウ♪

ラブラブラブポー♪ ウワウワウワハハッ♪

ありがたいやき♪ おめでたいやき♪ ここえみたいやき♪

いつも、ここから♪ いつか、ここへ♪ ついに、ここに♪

ありがたいやき♪ おめでたいやき♪ ここえみたいやき♪

For All Life♪

All Life Forever♪ All Life Forever♪

ピーピーピー♪

All Life For♪

All Life Forever♪ All Life Forever♪

ピーピーピー♪

アイアイ、アイアイアイ♪ ワクワク、ワクワクワク♪

イキイキ、イキイキイキ♪ ニコニコ、ニコニコニコエ♪

ルンルン、ルンルンルネ♪ サンサン、サンサンサンクス♪

For All Life♪ All Life Forever♪

...

ありがたいやき、おめでたいやき、 ここえみたいやきミライの いつかどこかのある日

「どうして、多くの異天体人類の中の一部の種は、悲しいほど、病んでしまっているのかしら」

「どうしてだろうね。それにしても、全く気の毒なことさ。1つの天体の中で病み続けて、アンチ非自種の方針をとり続けてしまうことは、1つの人体の中で病み続けて、アンチ非自細胞、アンチ非自組織、アンチ非自器官の方針をとり続けることがもたらす結果と同程度の新たな悲惨な結果を招いてしまうのだから」

「そうね。悲しくてつらいけれど、この新たな悲惨さに自ら気づいて自身で病を克服できるような賢い人類でなければ、宇宙デビューする資格はない。アンチ非自種を正当化し続けるような病み続けている未熟人類は、厳しいけれど、その天体から退場してもらわないといけない。次の新しい人類にチャンスを与えるためにも——。

もちろん、最初から宇宙デビューの資格があるなんてことは稀で、“罪を憎んで種を憎まず”の言葉が示唆しているように、過ちに気づいて軌道修正する可能性がある限り、本来どの未熟人類にも資格を得る望みがある」

音楽イン ♪ Birthtime

「ひとまずは、チャンスを与えられている、この異天体人類に、この病を克服して無事に育ち続けることを期待するしかないですね」

「そうですね。どうかこの病が治って無事に育ち続けれますように」

「今回の異天体人類は、この病を克服できて、無事に育ち続けて、健やかな誕生に至り、愛されながら繁栄し、宇宙の宝となれるだろ

うか？ それとも、この病を克服できないで、流産して、あるいは、中絶させられて、健やかな誕生を果たせず、疎まれながら滅亡し、宇宙の屑となるだろうか？」

「早く気づいてほしいね。この重大な分岐点の存在に——。

この病を克服できれば、存続。誕生。愛され、繁栄。宝。

この病を克服できなければ、流産。中絶。疎まれ、滅亡^{くず}。屑。

そんな、あたりまえのことに——」

「本当に、早く気づいてほしいよ。

この病を克服できなければ、他滅だけでなく自滅が待っているということ。そんなに、悲劇的でもったいないことに——」

「本当に、早く気づいてほしいね。この病を克服できれば、みんなが存続できて、健やかに誕生&宇宙デビューできて、いいことずくめが待っていること—— そんなに、おいしくてありがたいことに」

「この分岐点の存在を、今すぐ教えてあげたいけれど、自然治癒を待つしかない——」

「お願い。早く気づいて。早く」

「気づいて、病を克服できれば、この異天体人類も、健やかな恒久的平和、健やかな宇宙デビューにたどり着ける」

「たどり着いてほしいね。

この異天体人類も、いつかここへ——」

「全く、そうだね。——気づいてくれ！ 気づいてくれ！ 克服してくれ！ 克服してくれ！ どうにか無事に育ち続けてくれ！」

「無事に育って！ 無事に育って！

そうして、無事に、宇宙へ誕生してきて！ そうして、この宇宙

の新たな宝になって！ そうして、お祝いされて、愛され続けて！」

「ルネサックス、ルネサックス、ルネサンココエ、ピーピピー♪」

「なんですかン？ それは」

「はるかなカコから伝わるという、おまじないでござる」

「不思議な響き——。 ——ルネサックス、ルネサックス、ルネサンココエ、ピーピピー♪」

…

音楽フェード・アウト ♪ Birthtime

続・それから何年も後の初夏 (何十年も後)

パッと目覚めた。

そこは、帰郷の際の散歩がてら来ていた、あの地球のかすかな丸みがわかる岬の昼寝ポイント——。

ふと何かの気配を感じた。

見上げると、少女と犬がのぞき込んでいた。

！！ 思わず身を起こし、そのまま立ち上がった。

だれ？ しばし目をまるくするしかなかった。

「あの—— 私、これを海辺で拾ったので、ここに来ました。何か、ご存じありませんか？」 緊張した面持ちで、そう話した少女が、おずおずと、それを目の前に広げて差し出した。

見ると、あの地図だった。！！

今いる場所のところに、○印がついている——。

さらに目をまるくするしかなかった。

そのとき、突然の風にあおられ、彼女は地図を手放してしまった。

「きゃ！」 ふわりと海の方へと舞い上がり始める地図——。

僕は、とっさに手を差し出してそれをキャッチした。あっぶねえ！

「あ、ありがとうございます！」 ほっとして、心笑んでいる女の子。

「いえいえ、どういたしまして」 こちらも思わず心笑んだ。

なんていい子なんだろう。幸せに生きるんだよ。

その瞬間——。 お久しぶり～♪ コンパリーナだよ♪

コンパリーナ！？

そうだよ。いよいよ、私も、フレーム・オーナーにお仕えするこ